

第5波の振り返り

札幌市保健所

資料3-1

- 第5波における医療提供体制（方向性） … P 1
- 医療提供体制の強化 … P 2
 - （1）入院受入病床の拡充
 - （2）自宅療養、宿泊療養などの体制の強化
 - （3）受入医療機関の役割分担による効率的な病床活用
- 入院患者数と実質受入可能病床数の推移 … P 3
- 妊娠中の方への対応 … P 4
- 入院待機ステーションの役割 … P 5
- 第1入院待機ステーションについて … P 6
- 第2入院待機ステーションについて … P 7
- 第2入院待機ステーションの運用 … P 8
- 抗体カクテル療法の体制整備 … P 9

第5波における医療提供体制（方向性）

第5波の傾向として、ワクチン接種の効果により、入院患者の低年齢化が進んでおり、従来の重症化した高齢者への対応から若い世代への対策へとシフトが求められる。

自宅・宿泊療養

自宅療養者に対する電話診療のほか往診、訪問看護などの体制の強化を進める。

無症状・軽症



酸素投与の必要がない患者

※医師が必要と判断した場合は、入院

重点医療機関等

機能分化（要介護、透析、妊婦・小児等）を進めることで、役割分担を明確化し、医療機関の負担軽減につなげる。

中等症



酸素投与が必要な患者
(人工呼吸器・ECMO以外)

重症



酸素投与が必要な患者
(人工呼吸器・ECMO)

医療提供体制の強化

(1) 入院受入病床の拡充

	5月1日 (第4波)	8月25日 (第5波)
① 確保病床数	440	602
② 実質受入可能病床数	390	563
③ 入院患者数(市外患者含む)	357	344
④ 実質病床使用率 (③÷②)	91.5%	61.1%

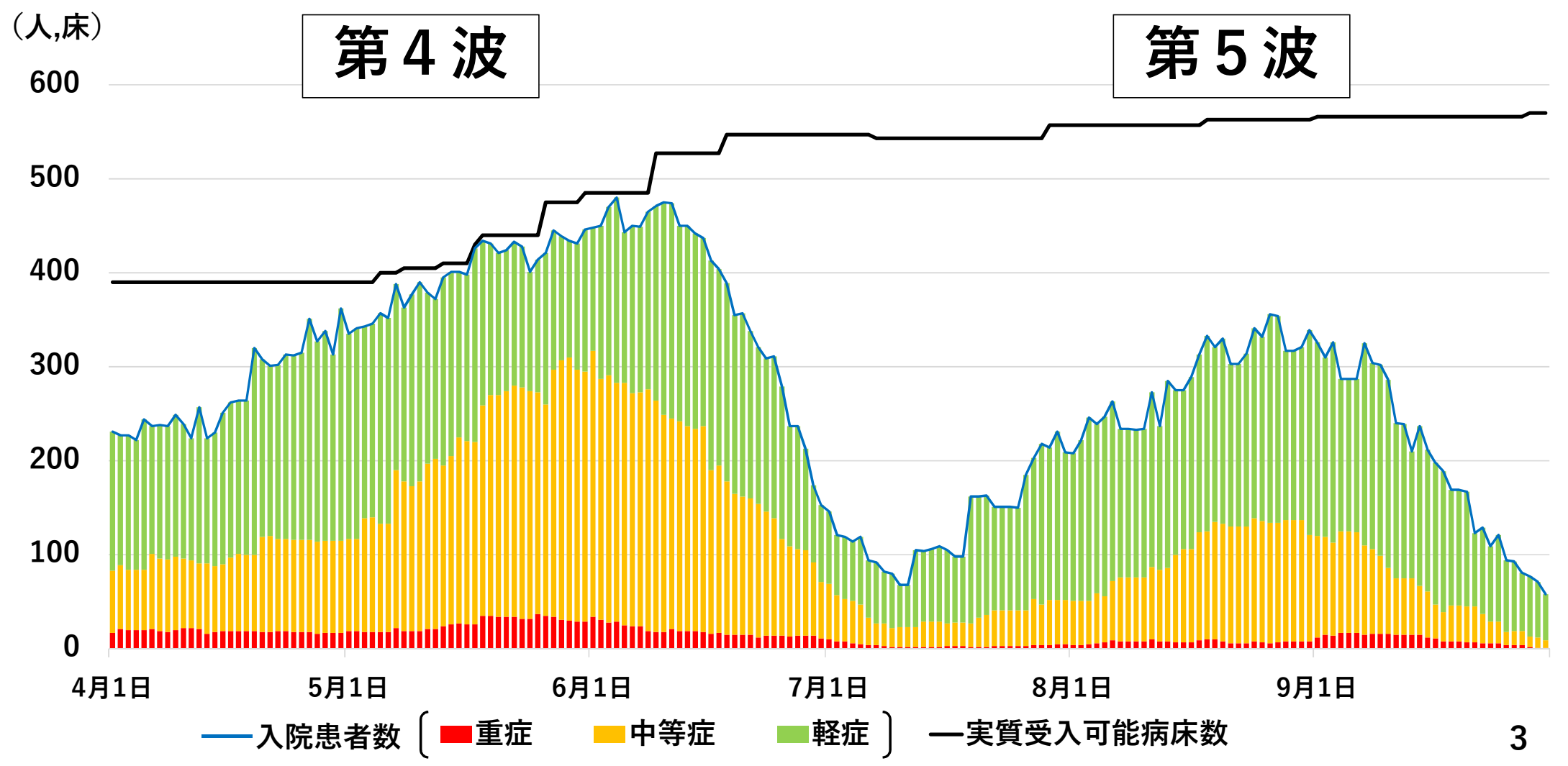
(2) 自宅療養、宿泊療養などの体制の強化【無症状・軽症】

- 自宅療養者に対する電話診療、往診の体制強化
- 入院の一時待機施設である「第2入院待機ステーション」の運用

(3) 受入医療機関の役割分担による効率的な病床活用

- 新型コロナウイルス感染症の重症度による受入先調整の継続
- 入院受入における機能分化（要介護、透析、妊婦・小児等）と役割分担

入院患者数と実質受入可能病床数の推移



妊娠中の方への対応

妊婦の陽性患者への医療提供体制

(1) 入院体制の整備

- ・入院可能な医療機関 **9 施設**

分産対応可能な医療機関	<u>2 施設</u>
妊娠週齢に応じた対応医療機関	<u>7 施設</u>

※入院した妊婦：累計70人（令和3年4月～11月8日）

(2) 外来診療体制の整備

- ・専門外来で診察可能な医療機関 **4 施設**

※外来受診した妊婦：累計25人（令和3年7月21日～11月8日）

妊婦へのワクチン接種

- ・健診先医療機関で接種できない場合は、本人意思を確認の上、
妊娠中の方や同居されている方を優先接種対象とし、集団接種会場
でワクチン接種を実施

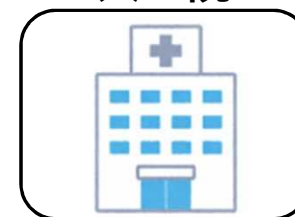
入院待機ステーションの役割

第3波まで

自宅・宿泊療養



入院



第4波、第5波

自宅・宿泊療養



入院待機
ステーション



効率的な入院受入
(医療機関の負担軽減)

入院



自宅・宿泊療養



第1 入院待機ステーションについて

- 令和3年5月9日からのまん延防止等重点措置の下、札幌市が旧宿泊施設を活用し、令和3年5月16日より運用開始。なお、同日から令和3年5月31日まで緊急事態宣言が発令された。
- 受入対象者は、宿泊・自宅療養中の患者で容体が悪化し、入院治療が必要となった患者であり、入院先が決まるまでの間、一時的に受け入れて酸素投与などを実施している。
- 定員は、22名であり、各ベッドはパーテーションによって仕切られている。
- 医師（1名）及び看護師（日勤6～8名、夜勤4～6名）が24時間常駐し、患者の容体観察、酸素投与、点滴などを実施。
- 令和3年9月1日から、抗体カクテル療法（中和抗体薬の投与）も実施している。



第2入院待機ステーションについて

- 新型コロナウイルスのさらなる感染拡大に備え、札幌市が旧病院を活用し、令和3年7月19日より運用開始。
- 受入対象者は、宿泊・自宅療養中の患者であり、容体が悪化して入院治療が必要となった患者に対し、入院先が決まるまでの間、一時的に受け入れて酸素投与などを実施している。また、保健所による日々の健康観察の結果、診療・検査が必要であると判断した患者に対し、日中に外来診療を実施している。
- 定員は、20名である。実施内容は、酸素投与や点滴に加え、CT撮影や血液検査にも対応可能。
- 医師（1名）及び看護師（10名程度）が24時間常駐し、患者の容体観察、酸素投与、点滴などを実施。また、放射線技師（1名）、検査技師（1名）を日中に配置。



第2入院待機ステーションの運用

(1) 夜間等における患者受入 (11月8日時点)

受入人数	診断後の対応	
250人	入院が必要	118人 (47%)
	自宅療養等の継続	132人 (53%)

➡ 夜間等に受け入れた患者のうち53%は、入院することなく自宅等での療養に戻ることができたため、入院受入医療機関の負荷軽減に大きくつながった。

(2) 日中の外来診療 (11月8日時点)

受入人数	診断後の対応	
128人	入院が必要	25人 (20%)
	自宅療養等の継続	103人 (80%)

➡ 外来診療を行った患者のうち20%は、CT検査等の結果、入院が必要と判断された。患者の重症度を評価してリスクがある患者を入院につなげることができた。また、自宅での療養を継続する患者の不安の軽減にもつながった。

抗体カクテル療法の体制整備

入院受入医療機関との連携のもと、早期投与によりハイリスク患者の重症化を防ぐ効果が期待できる抗体カクテル療法を積極的に活用できるよう体制整備を進めてきた。

(1) 治療実績 (11月8日時点)

36か所の医療機関などで、合計412人に投与

入院受入医療機関の37病院中、35病院【328人】

第1入院待機ステーション【68人 (9/1~9/16)】

(2) 治療効果

投与後に中等症や重症に悪化した事例はない。

→重症化予防に十分な効果が得られている。